

合唱活動参加者における指導者や共同学習者に対する認識の変容

—音楽学習の認識の変容とともに—

小坂 光

(本講座大学院博士課程前期在学)

The Transformation of Regard to Singing Leaders and Co-Learners in Music Learning

Hikari KOSAKA

Abstract

The transformation of singers' views about learning music is views of singers who regard learning about music and teaches them to recognize their own reasons based on their awareness of the continuity of learning and the learning action. This transformation could lead them to lifelong music learning. Conductors and co-singers effect transformation in singers' views about learning music. This study aims to clarify how this transformation was brought about in the views of singers who regard conductors and co-singers using SCAT (Steps for Coding and Theorization). Considering singers' perspectives regarding conductors and co-singers, singers cannot only use positive experience; therefore, positive and negative experiences are linked to each other and bring a new set of values and actions. Conductors must be sensitive to the singer's fluctuation between positive and negative experiences and update their perspective as appropriate. Furthermore, performing in a choir requires singers to be particularly aware of their co-singers. Singers are concerned with the community and act to transform their views about co-singers. Conductors and co-singers affect singers in various ways; in particular, conductors must lead the community choir as facilitators.

I 研究の背景と目的

学習の認識の変容とは、単に得た知識や技術が増えていくだけではなく、学習者自身の学習に対する気持ちや学習の価値づけが変容することである。学習の認識の変容が起こることで、自らの思考、価値観、態度は、継続的、持続的に変容する。音楽学習においても同様で、例えば「練習した結果、正しい音程で歌えるようになった」というできごとが起こった際には音楽学習に対する認識が変容し、「もっと練習してさらに難しい曲に取り組んでみよう」など、さらに高いレベルの学習に進んでいく。また、学習がいきづまった際にはそれまでに習得した学習方法や経験をふり返り、自分なりの学習を深めていく。そのようなサイクルをとおして、学習者はより高いレベルをめざして学習を継続している。これらのことから、生涯学習として音楽活動を行っている学習者は、自らの学習の変容について認識することでさらに自律的な学習者に成長するとともに、学習の本質に近づく。このような認識の変容は自らの行動だけではなく、指導者や共同学習者という環境要因によっても左右されるのではないだろうか。

小坂(2019)は、過去の指導者が生涯音楽学習の意識・行動に及ぼす影響について量的に研究を行うなかで、純粹に音楽に向き合うための練習手段を示すことや声を出すための心理的な障壁を下げることなど、指導者による練習中の工夫が重要であることを示唆している。また、学習者のもつ指導者像は学習者の音楽学習のスタイルにも影響を与えている。学習は継続することによって深化し、学習に対する思いや価値

観は変容し、それとともに、学習者の指導者に対する価値づけも変容する。また、学習者が求める指導者像は学習のレベルや方向によって多岐にわたることが考えられる。そこで、学習者が指導者に対して求めている理想像や指導者のとらえ方の変容について明らかにする必要がある。同様に、学習者をとりまく環境である共同学習者のとらえ方の変容にも言及する必要がある。このような変容はこれまでの量的研究では限界があり、質的な手段でみとらなければならない。

本研究では、音楽学習の認識の変容とともに指導者や共同学習者に対して学習者がどのように認識の変容を行ってきたのか、また指導者とは異なるレベルで共同学習者が学習者に対してどのように影響を与えているのかについて明らかにすることを目的とする。

II 学習支援者の役割

社会教育における学習支援者とは、「人びとの学習活動を『教える』『引き出す』『問い直す』など、何らかの役割をもって支援するひと、あるいは、学習者が主体的・自己決定的に学習を展開することを支えていく力量をもつひとが成人教育者であり、成人の学習支援者である」（三輪，2009，p.173）とされている。さらに、「学習支援者に共通するのは、専門的知識を『教える』役割よりは、学びの展開を支えることと、そのためにいくつかの役割を担っている点である」（三輪，2009，p.189）とされており、学校教育における教師とは性格が異なる。そもそも成人教育は、技術習得だけを目的をしているのではなく、学習者の思考や態度の変容が重要視される。渡邊（2002）は成人教育における学習について、「一定期間にわたって個人の知識・技能・価値観・態度などの持続的変化を伴う認識プロセスととらえられている。このプロセスは、習得（本来の学ぶという行為）、貯蔵（記憶する行為）、検索（思い出す行為）の互いに関連し合う行為からなりたつもの」（p.57）としており、学習の結果だけではなく、学習プロセスの重要性を述べている。生涯学習においては、これまでに得た知識を利用しながら、自分のもつ思考や認識を刷新していくことに重きが置かれ、成果発表会での結果よりも、学習している間に起こる学習者の変容が評価される。このプロセスに対して大きな影響を与えているのが学習支援者である。

三輪（2009）は、学習支援者の役割として「役割・方法・技法」「教える役割」「引き出す役割」「問い直す役割」「コーディネーターの役割」の5つを挙げている。さらに近年、ファシリテーターとしての役割も問われるようになってきた。以下、それぞれを簡単に整理する。

○役割・方法・技法

三輪（2009）はクラントン（1999）の論を引用し、「学習プロセスのなかでの学習者へのはたらきかけ」「学習プロセスに向けての手順」「特定の実践的スキル」と述べている。これらは社会教育の文脈にかかわらず、全ての教育者にとって必要とされる。

○教える役割

「知識を与える」「技術を高める」など、どのような学習にでも必要なもので、学習者が指導者に対してもっとも求めている役割である。

○引き出す役割

「おとなの自己決定性を尊重し、すでに自己決定型学習ができる学習者を励まし、学習者自身が自己決定型学習を自信をもって展開できるように支援することである」（三輪，2009，p.194）と述べられているように、学習者の精神面を支えることである。生涯学習においては自己決定がキーワードとしてあげられることが多い。学校教育の文脈では、学習は義務としてとらえられることが多いが、生涯学習は学ぶ内容も、学び方も学習者が決定することができる。学習の自己決定性を高め、自立した学習者になる支援を行うことが「引き出す役割」ではないだろうか。

○問い直す役割

三輪（2009）は「学習者決定型の学習を体験し、ふりかえる学習を進めていくうちに、『学習支援者』の役割は、さらに変化をみせるようになる。学習支援者は『教える役割』に戻るわけではないが、学習者にはたらきかける役割の比重が増すようになり、学習支援者と学習者との相互的な関係のなかで、学習プロセスを進めることになるので、『相互決定型』となってくる。そこでは、学習支援者と学習者の共通の価値

観や関心の根拠を探究する『共同学習者』の役割、現状の変化を促す『改革者』としての役割を果たすことになるのである」(p.195)と述べている。前述の役割は全て、支援者が学習者にどのようなはたらきかけをするかという視点でとらえられていたが、問い直す役割は「相互決定性」という支援者と学習者の関わりという視点がうまれている。

○コーディネーターの役割

学習グループ同士をつなぎ、より大きな学習のコミュニティとして存在できるように調整することである。支援者は学習者の視野と活動の枠を広げていく必要がある。

○ファシリテーターとしての役割

近年問われるようになってきたファシリテーターは、学習者に対して支配的なニュアンスを避けるために使われるようになった語句であるが、「教育者は、(中略)学習者に対して以下の点を気づかせることを意図して行動しなければならない。ひとつは、学習者に自分たちのニーズの〈根拠〉を気づかせることであり、もうひとつは、ニーズを自覚し満たそうとする際の習慣的な認識、思考、感情、行動のあり方が、みずからの意味パースペクティブ⁽¹⁾によっていかに狭められてきたのかを気づかせることである。これこそが、専門的な成人教育者の役割である」というメジロー(1990)の論を引用し、三輪(2009)は参加者のニーズの根拠を問い直して気づきをもたらす役割だと述べている。変容的な学習⁽²⁾を潜在的に求めている生涯学習者にとって、学習者の認識の変容を促すこの役割は非常に重要である。

では、生涯音楽学習において学習支援者とはどのような役割を果たしているのだろうか。ピアノやヴァイオリンなど、楽器の個人レッスンにおいて学習支援者とは、いわゆる「先生」であり、生徒の音楽学習のプロセスを見守りながら、技術習得を主眼にして接する存在である。では、本研究で取り扱う合唱活動において、学習支援者とは、学習者にとってどのような存在であるのか。また、どのような存在であることが望ましいのであろうか。楽器のレッスンにおいて支援者は、演奏に直接関与しないことが多い。しかし、合唱における支援者は多くの場合、指揮者を意味するが、演奏に直接関与することになる。また一人ひとりの技術向上を望みながらも、合唱としての音楽の質を高めるためには、集団に対して影響を与えることになる。さらに、音楽を生涯学習、すなわち変容的な学習としておこなっている学習者にとって、指導者に対する認識は変容していく可能性がある。

Ⅲ 研究方法

合唱活動に関する事前アンケート調査においてインタビューに協力できると回答した10名を対象に、ライフストーリー手法を用いたインタビュー・分析を行った。インタビュー調査においては、現在の価値観をもとに過去の学習について想起してもらいながらインタビューを行う「対話的構築主義」をとり、分析を行った。本研究では、指導者や共同学習者の発言がもっとも多かった調査対象者を分析対象とした。

1. 研究参加者

インタビュー対象者は、20代女性(社会人2年目)の安藤さん(仮名)で、女声合唱団と混声合唱団に所属している。合唱経験は小学校3年生から現在まで途切れたことはなく、合唱歴は16年になる。中学時代は全国大会常連の強豪合唱部に所属していた。現在は平日に仕事をしながら、土日は合唱の練習に熱心に取り組む学習者である。女声合唱団では副代表を務めている。

2. データの採取と分析方法

2019年1月に、ライフストーリーインタビューによる聞き取りを行い、データを採取した。インタビューは録音後、逐語記録化し、指導者と共同学習者に関する発言を抜き出し、それを分析データとした。データの分析には、SCAT⁽³⁾(Steps for Coding and Theorization)(大谷, 2008, 2011)を使用したあと、得られたストーリーラインと理論記述をもとに、研究対象者の指導者と共同学習者に対する認識の変容について考察を行った。

IV 安藤さんのストーリーラインと理論記述

1. ストーリーライン

安藤さんは、小学校時代の指導者の取り組みによる特別な活動によって合唱を始めた。中学校入学とともに指導者と共同学習者への認識が誕生し、オーディションという場で共同学習者との関わりの認識がうまれる。身体的な不調がありながらも先輩への愛情から共同学習者との関係性の変化によって楽しく活動を行う。しかしいじめによって共同学習者との関わりの危機に瀕し、共同学習者との危機がコンクール結果へ影響することへの不安もうまれる。中学時代に見た高校の先輩の姿への憧れから高校でも合唱部に入部するが、憧れの先輩からの「仲間」への意識の忠告を受ける。コンクールへの悔いと共同学習者や指導者の助言に葛藤する。葛藤の結果、聴衆への意識が誕生する。指導者の信念や指導者からの比較によって、指導者からのサポートの受け方に悩んだが、一生懸命取り組むことへの指導者の信念を後になって理解した。社会人になって先輩に女声合唱団誘われ強制的に入団するが、共同学習者の姿の認識の変化が起こる。また、指導者の変化により義務感という練習参加の価値観の認識もうまれるが、共同学習者の音楽への取り組み方が高校時代とは違うことを認識する。その後イベント初体験への恐怖もあったが、混声やジョイントの楽しさの発生、いつもと違う指揮者と混声合唱という新しい世界の発見があった。その影響で入ったインカレの合唱団で、別の環境の共同学習者との関わりによる楽しさの種類や新しい価値観が誕生。「練習参加したい」「心地よい」を感じて新しい価値観のもとで今までの活動をとらえ直すようになると、女声合唱団の代表不適任や役割への懷疑がうまれる。代表として指導者との関わりを試行錯誤するが、新しい価値観では代表を続行不可能で、適任の役割を発見する。現在は会いたい人と会えることが自分の生活のリズムになっており、発達段階で指導者や共同学習者への認識の変化が起こってきたことを自覚しており、特に共同学習者についての認識が広がっている。結婚や出産を展望しており、現状が続けば継続できるが、活動を中断する可能性も示している。

2. 理論記述

- ・指導者と共同学習者への認識が誕生し、オーディションで共同学習者との関わりを認識する
- ・身体的不調がありながらも先輩への愛情から共同学習者への関係性の変化で活動を継続する
- ・いじめによって共同学習者との関わりの危機に瀕し、コンクール結果へ影響することを不安に思う
- ・合唱活動を継続するが、憧れの先輩からの「仲間」への意識の忠告を受ける
- ・コンクールへの悔いと共同学習者や指導者の助言に葛藤するが、聴衆への意識が誕生する
- ・指導者の信念や指導者からの比較で悩んだが、一生懸命取り組むことへの指導者の信念を後になって理解する
- ・強制的に入団するが、共同学習者の姿の認識の変化が起こる
- ・指導者の変化による練習参加への価値観の認識が誕生する
- ・共同学習者の音楽への取り組み方の変化を認識する
- ・初体験の恐怖、混声やジョイントの楽しさ、いつもと違う指揮者という新しい世界の発見をする
- ・新しい世界で、別の環境の共同学習者との関わりで楽しさの種類や新しい価値観が誕生する
- ・新しい価値観で今までの活動をとらえ直すと、自身の代表不適任や役割への懷疑が生まれ、適任の役割を発見する
- ・会いたい人と会えることが自分の生活のリズムになっている
- ・発達段階で指導者や共同学習者への認識の変化が起こってきている
- ・結婚や出産に対しての展望をもち、活動を中断する可能性も示唆している

V 指導者への認識がどう変わったか

安藤さんは小学校の頃、指導者の取り組みによる特別な活動によって合唱を始めたが、当時は「すごい楽しかった。たぶんすごい歌うことが好きだった」と合唱が好きで活動が楽しいという気持ちが強かった。しかし中学生になり、「顧問の先生が厳しくて」というように、指導者というものに対する認識が生まれて

いる。高校入学後は指導者の信念を理解できず、また他者との比較で悩み、指導者からの助言や忠告が安藤さんのなかで否定的な面をもたらしていたが、卒業後に一生懸命取り組むことへの指導者の信念を理解し、現在はその経験を肯定的に受け止めている。

また、高校卒業後は指導者という存在の立場の変化が安藤さんに大きな影響をもたらす。これまで「先生」という絶対的な存在のもとで活動を行っていたときには意識したことのなかった「練習への義務感」を自覚する。学校教育における部活動という「それをすることが当たり前」の世界から、自分で選択することができる発達段階に進んだことによる練習への義務感を自覚した。これは自分の選択に対して「本当にこれでいいのか」と自問自答する機会になっていることと、指導者や共同学習者に怒られるから行かなければいけない、という外的な影響の2つの側面を持っていることが考えられる。

さらに、外部の指揮者との音楽経験をとおして、新しい音楽の世界を発見することができている。ずっと一人の指揮者とだけ一緒に活動していると、潜在的に学習者に存在する意味パースペクティブが狭められる可能性がある。特に、音楽という多様性をもつ領域においてはその傾向が強い。そのため、常に自分の意味パースペクティブを更新していくことが必要である。安藤さんは指導者のファシリテーター的な役割を享受し、「混声合唱が楽しい」「いつもと違う指揮者で歌うのが楽しい」という新しい音楽の世界を発見することができ、その後インカレの合唱団に入るという行動の変化にもつなげることができている。

小・中学校時代の指導者は安藤さんにとって「教えてもらう存在」であり、指導者の「教える役割」を強く認識していた。しかし高校時代の顧問は、「一生懸命取り組むことの重要性」を身につけさせるために「引き出す役割」を使っている。曲や練習日程を自分たちで決めさせるなど、自己決定性を高めるための指導を行っていたが、安藤さんの指導者への認識は「教えてもらう」のままだったため、指導者と学習者で齟齬が起こっている。これが安藤さんにとって当時指導者に対して否定的な印象をもった理由のひとつである。しかし、安藤さんは卒業後に指導者の信念を理解した。これは、指導者が自身の信念を「いつ気づいてくれてもいい」という考えのもとで指導した結果があらわれているともとれる。

高校卒業後、練習への義務感を意識するようになった安藤さんは、指導者が変わったことで「問い直す」ようになる。変容的学習において重要なことに、自分のもつ枠組みをのりこえる経験がある。安藤さんは今まで「練習に参加することは当たり前」という枠組みをもっていたが、その枠組みを疑い、「練習に参加しない」という選択をすることができるようになる。その後、混声合唱や外部の指揮者の音楽にふれるなど、これまでに経験したことのない音楽経験をとおして枠組みをのりこえ、インカレの合唱団に入るといって、安藤さんにとって新しい行動が呼び起こされた。このように、必ずしも指導者がコーディネーターやファシリテーターになって、学習者のニーズの根拠に気づかせなくても、安藤さんの場合は環境の変化に応じて枠組みを自分で更新し、最終的に自分で自分をファシリテートしていくことができるようになっていく。

V 共同学習者への認識がどう変わったか

安藤さんの小学校時代の話の中には、共同学習者の話は全くなかった。中学校では、先輩からの叱咤やオーディションという場で「先輩を差し置いて自分が受かって気まずい思いをした」という経験から、共同学習者への認識が生まれている。「反抗期と同時に声が出なくなる」という身体的不調がありながらも先輩への愛情（共同学習者との関わり）から、活動を楽しく継続することができる。しかし、部活の役職をめぐって同級生からいじめを受けることになり、共同学習者との関わり方の危機に瀕することになる。この関わり方の危機によって部活の雰囲気が悪くなり、コンクール結果に影響することへの不安がよぎる。

中学時代は共同学習者と仲が悪くても活動を続けるというスタイルだったが、高校時代は憧れの先輩に仲間意識の必要性について忠告を受けたり、「コンクールに対する思い」と「音楽をすることの意味」について共同学習者の助言を受け、合唱活動をするうえでの共同学習者との関わり方や、なぜ音楽をするのかについて葛藤する。

高校卒業後、先輩からの誘いでOGの女声合唱団に強制的に入団させられるが、「高校のときに抱いとおった先輩像と、大学入ってからの先輩像と、先輩同士の関わりとか全然違うことに気づいて、めっちゃ仲良くなると。高校のときは神みたいな感じにしとったけど」と述べているように、共同学習者の姿に対す

る認識が肯定化される。さらに、先輩たちの音楽への取り組み方が高校時代とは異なることに気づく。このように、大学生になって他者の音楽の関わり方に目が向くようになり、自分の音楽との関わり方に対して疑問をもち、自分がよりよく音楽活動をしていくためにはどうするべきかということを考えるきっかけとなっている。

指導者や混声合唱という新しい世界を発見した後に入団したインカレの合唱団では、今まで育ってきた環境とは別の環境にいる学習者と出会い、「楽しさの種類にはいろいろある」ということと「単純に楽しんでいい」という新しい価値観が誕生する。安藤さんはこれらを全て肯定的にとらえているが、自分にとって心地よいとらえ方ができたとき、これまでの経験の再解釈が起こるようになる。その結果、安藤さんは女声合唱団の代表業は自分には不適任であるから、むしろ自分が適任の役割へ変わりたいというポジティブな決断を行った。

さまざまな共同学習者からの影響を受けた過去を振り返る過程で、安藤さんは共同学習者への認識が変容してきたことを自覚した。そして現在の合唱活動のあり方としては、合唱が好きな同好の仲間に出て歌えるという生活のリズムを大切にしたい、というように合唱をとおした共同学習者との関わりを高く価値づけている。また、中学時代のいじめをめぐった一連の話について、安藤さんは現在も否定的にとらえているが、この経験がのちの活動のなかでの共同学習者との関わりに大きな影響を与えている。安藤さんは共同学習者との関係がうまくいっていないと音楽はできない、という前提をもつようになり、人と人との間をとりもつ役割が自分には適しているため、今後もそうでありたいと思っている。

VI まとめ・今後の課題

生涯音楽学習においては、学習者がとらえる肯定的経験と否定的経験が相互に関わりあいながら新しい価値観を生み出したり、新しい行動につながったりする(図1)。必ずしも肯定的な経験だけでは新しい価値観を生み出すことができず、むしろ否定的な経験に肯定的な要素が結びついた経験が枠組みを乗り越えて新しい価値観を生み出すことになる。指導者はその揺らぎに敏感になり、学習者の意味パースペクティブを更新させていくことが必要なのではないだろうか。特に、学習者は不安を感じた際に、不安を乗り越えようと何か思考したり行動を起こそうとし、その葛藤の先に新しい学びが生まれる。この過程の繰り返しがいわゆる変容的学習であり、生涯音楽学習においても重要性は高い。

また、生涯音楽学習のなかでも合唱という形態は、共同学習者によって特別な意識を生み出す活動ではないかと考える。加藤(2008)は「合奏や合唱とは、相互に独立した意識を持つ個体が集まって同時に同じ楽曲を演奏したり歌ったりしている状態ではなく、合奏や合唱をすることによって個々の意識の流れが融合し、一つの集合的な意識となっている」と述べているように、合唱活動を行うことで、「共同体の一員として学習の場に参加している」という意識が生まれる可能性がある。本研究でとりあげた安藤さんは、共同学習者の学習への取り組み方を見て自分の意識や取り組み方が変わっている。活動のなかで共同体への関わりかたについて思考し、学習に対する認識が変容することが、共同学習者との関わりによる意識の変容ではないだろうか。

生涯学習における合唱活動を行っている学習者にとって指導者や共同学習者という他者は、学習者にさまざまな視点を与えたり、学習者のもつ意味パースペクティブを更新するなど、学習内容と同等もしくはそれ以上に学習者に影響を与える。特に指導者は、ただ音楽の知識や技術を伝えることばかりに重点を置くのではなく、指導者の役割として近年注目されるようになったファシリテーターとして、合唱団という共同体を導いていくことが求められるのではないだろうか。

本研究ではひとつの事例を掘り下げた。今後は、多くの事例をもとに、指導者や共同学習者に対する認識の変容の多様性をみるとともに、音楽経験による差にも言及していく必要がある。

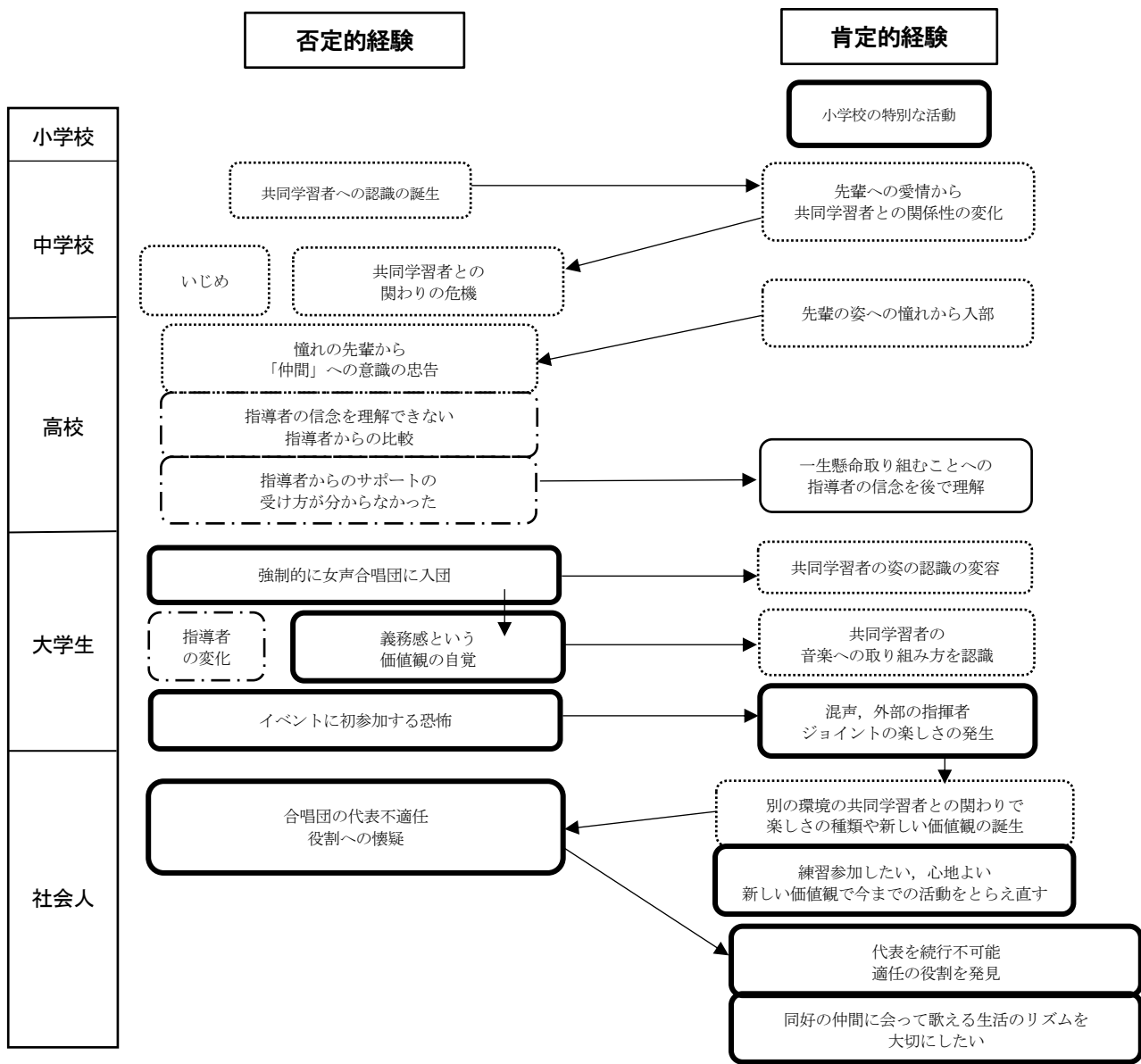


図1 安藤さんのインタビューの分析に基づく概念図

注

- (1) 人が物事を判断するための枠組みのことで、私たちが経験に基づいて定義し、理解し、行動を起こすことに影響をおよぼしている (メジロー, 2012)。
- (2) 「人びとは、これまでの知識獲得の方法に磨きをかけることで変化する状況に適応しようとするよりは、むしろ変化するできごとをより完全に理解し、自分の生活に対する枠組みを手に入れねばならないと考えるようになる。子ども期の形成的学習 (formative learning) は、成人期においては変容的学習 (transformative learning) へと変化するようになる」(メジロー, 2012, p.5) と述べられるように、自分の経験を解釈し直し、古い経験に対して新しい意味を与えていくこと。
- (3) 言語データをセグメント化し、そのそれぞれに (1) データの中の着目すべき語句, (2) それを言いかえるためのデータ外の語句, (3) テキスト外の概念, (4) そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく 4 ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きからなる分析手法 (大谷, 2008, p.27)。

引用・参考文献

- 加藤晃生 (2008) 「新しい学習指導要領における合奏・合唱の指導の位置づけの検討—アルフレッド・シュッツの「相互的同調」理論を参考に」『音楽教育実践ジャーナル』 vol.6, no.1, pp.97-107
- 小坂光 (2019) 「過去の指導者が生涯音楽学習の意識・行動に及ぼす影響—合唱活動を中心に—」『音楽文化教育学研究紀要』 No.31, 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座, pp.99-106
- メジロー, J. [金澤睦, 三輪建二監訳] (2012) 『おとなの学びと変容—変容的学習とは何か』 鳳書房
- 三輪建二 (2009) 『おとなの学びを育む』 鳳書房
- 大谷尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』 54 (2), pp.27-44
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析方法」『感性工学』 10 (3), pp.155-160
- 渡邊洋子 (2002) 『生涯学習時代の成人教育学—学習者支援へのアドヴォカシー—』 明石書店
- 山元淑乃 (2017) 「アニメ視聴を契機とした日本語習得を通じた発話キャラクターの獲得過程に関する事例研究—フランス移民二世 C の語りの質的分析から—」『言語文化教育研究』 第 15 巻, pp.129-152

【参考資料】

テキスト	<1>注目すべき語句	<2>語句の言いかえ	<3>テキスト外 の概念	<4>テーマ 構成概念
小学校に音楽同好会というクラブができたんよ。で、うちのお母さんが小学校と中学校のときに、少年少女合唱団に入ってたっていう話を聞いていて、母はほんととは合唱とバレーボールをやってたんよ。で、どっちの話も聞いてたんだけど、ほんととはスポーツをさせたかったらいいんだけど、うちの小学校にはバスケしかなくて、バスケはあんまり好きじゃなかったらいいんよ。で別に音楽同好会も勧められたわけではないんだけど、どっちの経験もきいてたうえで、自分は音楽のほうが楽しそうと思ったんよ。そのお母さんの話を聞いて。その音楽同好会ができたっていうチラシ？チラシじゃないな、なんかプリント？を持って帰って、人生で初くらい、自分で「これやりたい」って言ったんよ。でおかあさんも「おお」みたいな感じになって。で始めたんよ。やっぱ小学校3年生かな。でそのときの音楽の先生がすごいよくしてくれて、そのとき地域の音楽のお祭りとかにも出るし、結構特別な活動？みたいな。小学校の中では、特別な活動をさせてもらった。すごい楽しかった。たぶんすごい歌うことが好きだった。でそれで小学校5年までは、公民館の祭りとかに出たりして、活動して、なんかせりふがあるような、11匹のねこ？みたいなのをやったりとか、児童合唱をやったりとか、コンクールには出てなかった。そのときは、っていう	そのときの音楽の先生がよくしてくれて小学校の中では特別な活動をさせてもらった すごい楽しかった	音楽の先生の取り組み 特別な楽しい活動	指導者の取り組み (特性)	指導者の取り組みによる特別な活動
Nコンの課題曲の講習会のモデル合唱団だった、その練習だったんだけど、すごい覚えとる。「めぐりあい」だった。あれをめっちゃぶち怒られてから、で「え？」みたいな感じで思ってたもう巻き込まれて、そのときはね、60何人くらいだったかな。合唱部。合唱部中心の生活に変わって、まあ顧問は女の先生で。厳しい、基本厳しいけど、1個上の先輩がむっちゃ怖くて、まじ鬼くらい怖くて、とにかくおびえながら部活。	女の先生 厳しい 1個上の先輩怖い おびえて部活	厳しい顧問 先輩への恐怖で おびえながら活動	指導者と共同学習者への認識 (結果)	指導者と共同学習者への認識の誕生
Nコンは出れんから、全員。オーディションがあって、コンクールメンバーを選ぶんだけど、パートによって偏りがあるけん、1年生が何人入れるかっていうのは、結構変わってくるんよ。でもアルトは比較的枠があったんよ。で、オーディションしたら受かって、コンクールメンバーに選ばれたんよ。自由曲も課題曲も歌えたのは1年生2人しかおらんくて。あたしともう一人友達を選んで？そのとき、先輩が落ちたんよ。課題曲だけとか自由曲だけとか。片っぱはみんな出たけど。どっちも出たのは1年生なのにあたしが出たんよ。もうむっちゃ気まずくなって先輩と。でもうむっちゃ怖くて。で2個上の先輩も怖くて。でなんか、その1個上の先輩と2個上の先輩がそのことについてしゃべって、なんかうちはむっちゃ肩身が狭いみたいな。	オーディション コンクールメンバー あたしともう一人友達 が選ばれて、先輩が落ちた 先輩たち、肩身が狭い	オーディション でコンクールメンバーに合格 先輩が落選 先輩に対して肩身が狭い	共同学習者との関わり の認識 (結果)	オーディションという場 共同学習者との関わり の認識
2年生になって、反抗期だったんよね中2は、あからさまな中二病で。親にも反抗しとったし、でそれと同時に声も出んくなって、スランプみたいな感じになったんよ。中2ですごい。でコンクールメンバー落ちるんじゃないかみたいなのがすごい不安で。まあその辺から、声とか出んこともあったけどまあ楽しくやるし、1個上の先輩とは仲がいいほうだったから、先輩のことも大好きだし、合唱部も楽しいし、しかもえっと全国に行ったんよ。1年生の時は落ちたんよ。中国大会で。それこそさっき言ったみたいに、すごい空気感じゃん？もう先輩泣き崩れとるし、自分たち申し訳ないみたいな。特にNコンはメンバー選ばれて、自分ら出ると先輩が出れなかったのに落ちたみたいな。なんかもう絶望みたいな感じで。で中2は行けたんよ。でめっちゃうれしくて、結構もう中2は最後ギリギリまでは楽しかった思い出。先輩も、1年生のときの2個上みたいに理不尽に怒る感じではなくて、1個上の先輩は、ちゃんと「先輩」って感じだった。	反抗期 同時に声も出んくな つた スランプ コンクールメンバー落 ちる 声とか出んけど楽し くやるし、先輩のこ とも大好き 1個上の先輩は、ち ゃんと「先輩」	反抗期 不調 落選 楽しく活動 先輩への愛情 理不尽ではない 先輩	自分の身体の不調 (影響)、共同学習者との関係性の変化 (結果)	身体の不調がありながらも先輩への愛情から共同学習者との関係性の変化
あたしはアルトのパーリーダーに選ばれて、そこから、同じパートの人からめっちゃくちゃねたまれるみたいな。その日から無視されたけん「やばいね」とは言っとただけど、引退コンサートに向けて先輩に送るアルバムみたいなものを作るんよ。でそれを先輩のページぐちゃぐちゃにされて、完成した日に。どうしよう、みたいな。練習でも2年生が後ろで、他の子らがずっと練習に参加しない。っていう構図をさせられて。クラスのほうが、仲良かった子と全員離れたんよ3年生のときに。でいじめとる系の子ばかりと一緒にあったんよ。でしかもクラスでは普通にしてくるんよ。部活行ったらいじめになるんよ。私に対してはね、ほかの子にはどうしとったかとかは知らんけど。私に対してはそうだったんよ。でそのギャップがすごいしんどくて、だったらもうクラスでもなんていうん、普通にせんかったらええじゃんって思ってたんよ。普通にしてくるんよ。おさまったんよなって思ってた部活行ったらそうじゃないみたいな。のがすごいしんどくて。正直もうね、歌どころじゃないっていうのはあったんよ。すごい中3の時は。歌がどうだったって記憶よりも、そっちで苦しかった記憶のほうが強くて。	パートリーダー ねたまれる 嫉妬 クラスでは普通 ギャップ 歌どころじゃない そっちで苦し かった記憶	パートリーダー に選出 嫉妬 クラスでの関係 とのずれ 歌よりもい じめの記憶	共同学習者との関わり の危機 (結果)	歌どころではないいじめによる共同学習者との関わり の危機

でも全国大会行けて、80人おったんよ。じゃけん2, 30人おったんよとパート。絶対いけんって思ったんよ。中大の前日とかまでそんなん続いたし。であつた個人的にしんどかったのが、自由曲が4パート分けだったんよ。基本は3パートで動くじゃん合唱で。で4パートだったんだけど、そのいじめと子とあたししか4パートにおらんかったんよ先輩が。4パートの時はその子は優しいんよ。でも3パートになって分けられたらやってくる	全国大会絶対行けれん4パートの時は優しい3パートになったらやってくる	全国大会落選の危機パートによる扱いの差	共同学習者との関わりによる活動への影響の不安(影響)	共同学習者との危機がコンクール結果へ影響することへの不安
中学は60とか70とかおるけど、高校で10何人減るんよ。みんな燃え尽きて。コンクールで、も、それでも続けた人がが高音に行くんだけど、あたしとかは早く高校音楽部に行きたかった。うまかったんよ。憧れだった。うまいって思ってたけん。なんかとなりで歌うこととかあるんよ。高校のお姉さんと中学のときに、で、「すっごいまい」って思ってた、かっこいい、絶対入りたいみたい。逆にその子らに入ってほしくないって思ってたけん、先にバツて入って、そしたら入って来んやろうと思つたら、5月くらいにその子ら集団で見学に来て、終わったみたい。高校人生これで終わったわって思つたんをめっちゃ覚えて、で結局11人入部したんかな。	みんな燃え尽きて、早く高校音楽部に行きたい、憧れ、その子ら入ってほしくないって思つてたけん先にバツて入って	疲労自分の憧れ真っ先に入部	先輩の姿への憧れ(背景)、疲れずに入部(結果)	先輩の姿への憧れから入部
全員じゃなかったけど。入ってきて、まじかみないな感じになって、高1で1回問題じゃないけどまあ仲悪すぎてもう、でお姉さんから呼び集められて、なんでそんなことになつたんみたいな？一緒に音楽をする仲間なのに、そんなふうにしつたらいい音楽はできんよ、みたいな感じになって、話し合わせられるみたい。そしたらその子の一人から、「いろいろあつたけど、水に流してやるよや」みたいな言われて、プチされるみたい。「自分のやったこと覚えてん？」みたいな。結果、お姉さんたちに「歌は歌でちゃんときいてます。けどプライベートでこの人たちと仲良くすることはありません」みたいなことを生意気にも言う。	呼び集められる、一緒に音楽をする仲間いい音楽はできんよ歌プライベート仲良くすることはありません	先輩からの忠告仲間への意識、音楽への向き合い方歌とプライベートの分離	憧れの姿の人からの忠告(影響)、共同学習者と音楽への認識の変化(結果)	憧れの先輩から「仲間」への意識の忠告
コンクール終わったときに、支部大会ダメ金で、全国行けれんですごい落ち込むじゃないけど、いつもその、本番が終わったら反省会があつて、ひとりずつまわされて、反省をするみたいなのがあつたんだけど、「なんで行けれんかったんか」「悔しい」「悔しい」ばかり言っていて、であつたらはそれを見とるけん、そんな感じの考え方になるじゃん？そもそも中学からきとるし。でも先生と3年生のお姉さんだけは、そういうことを言つとんじやない、全国に行きたいけん音楽をやつとるわけじゃないでしょみたいなことを言われとつたんよ。今だったら全然わかるけど、そのときは全然わからなくて、「じゃあどうしたらいいん？」って思つて。そのやった結果の先に結果があるみたい。自分たちの音楽をやつた結果で賞がついてくるかもしれんし、そうじゃないかもしれんし、やりきるほうが大切みたい。な。で観客の人に聞いてもらうことが大切っていうことを大切にする部活だったんだけど、まあそれすごい理解するの時間に時間がかかるんよ。中学のコンクールモードがあるし。なんかそれで秋くらいにお姉さんたちが崩れたんよ運営が。コンクール終わってから。	コンクール終わった悔しい先生と3年生全国に行きたいけん音楽をやつとるわけじゃないでしょやった結果の先に結果があるみたい。やりきるほうが大切みたい。な。聞いてもらうことが大切理解に時間がかかる	全国大会、悔い音楽への向き合い方過程の先の結果全うすることが重要聴衆が大切理解できない	悔いと共同学習者や指導者の言葉の葛藤(結果)	コンクールへの悔い共同学習者や指導者の助言に葛藤する聴衆への意識の誕生
私の5個上の先輩がもう伝説の学年とされとて、ずっと先生の話の引き合いにだされるんよ。「あんときのお姉さん」ってずっと言われ続ける。とにかく自分たちでやりますっていう部活なんだよ。自主性みたい。もうずっと比較されるのもしんどくて。	伝説の学年、話の引き合い、自分でやりますっていう部活、自主性みたいな、比較もしんどい	先輩の話、先生が比較、自主性、比較されることとしんどさ	指導者からの自主性の比較(影響)	指導者の信念や指導者からの比較
もう自分たちでやれたい。できんけん、助けしてくれとつたんだと思うんだけど、自分たちのには自分たちでやらんといけんみたいな感じだし、たぶん私たちの聞き方もあつたんだと思うんよ。先生に聞いたら怒られるって思ってたけん聞かなくて、もつとちゃんと聞けば教えてくれたはずなのに。どうやって聞くかを話し合うみたい。もうわけわからんかった。しかもたぶんねえ、小心者がそろつとつたんだと思うんよ。けんかしろみたいな言われて。いつもお姉さんたちは中部屋でけんかしてましたみたいな。自分の意見を言えみたいな。けどあたし自分の意見がまずない。	自分たちでやれ助けしてくれとつた先生に聞いたら怒られたって思ってたけん聞かなくて、もつとちゃんと聞けば教えてくれたはず	自主性先生のサポート質問、叱られる、指導	自主性に関しての指導者のサポートを受け取れなかった(結果)	指導者からのサポートの受け方
たぶん後から思うのは、先生はたぶん、理由はなんでもよかつたけど、私たちが「これです」って言ったら「じゃあそれで」ってなつたことを、ちょっとでもついたら「あ〜」みたいな感じで「違つたんや」ってかえつていくから、「そうじゃないけん、やりたいことをやれ」みたいな。そこが問題だったんよ。なにがじゃあやりたいんよ。じゃあなにだったら本気でやるん？みたいな感じで、伝えてくれれば、同じ曲を何回も持つていけば、普通に何回目まで通つとつたのに、言われて違つてなつたけん変えるみたい。変えて理由をまたこじつけて持っていくみたい。そういうことをしてほしいんじやないじゃん？これがやりたい理由をいっぱい考えてくれればいいのに、ここも変えてくるから、どれがやりたいん？みたいな。	先生は理由はなんでもよかつたか、やりたいことをやれなだったら本気でやるん？	推し量る、理由を持つ、一生懸命取り組む	後になって「一生懸命取り組むことへの指導者の信念に気づく(結果)	一生懸命取り組むことへの指導者の信念を後になって理解
一応卒業演奏会の飲み会とかで、他のお姉さんおるけん、とりあえず連絡先交換しよみたいな感じになって、OGのメーリスとかもあつたりして、一応女声合唱団の見学だけいって行って行ったんよ。そしたらもう「入るよね」みたいな。「は、はいります・・・」みたいな感じで入るよね。やることも他にないしみたい。しかも大学のサークルがしょぼいんよ。部活しかできんけん、そのぼんぼん作れたいせんし、軽いものが多いなくて。まあ特にやりたいのでもないし、大学の合唱部なんか入る気もなかつたし。じゃあとりあえず女声合唱団入る？みたいな感じに入って、でもお姉さんらがもう盛り上げるしおもしろいしさ。なんか高校のときに抱いとつたお姉さん像と大学入つてからのお姉さん像とお姉さんとお姉さんの関わり合いとか、全然違つことに気づいて、めっちゃ仲良くなつとる	女声合唱団の見学、「入るよね」やることも他にない。高校のときに抱いとつたお姉さん像と大学入つてからのお姉さん像とお姉さんとお姉さんの関わり合い、全然違つ	合唱団見学、強制的、やりたいことでもない、先輩の姿の見方の変化、改善	流れで強制的に入団(結果)、共同学習者への認識の変化(結果)	強制的に入団、共同学習者の姿の認識の変化
初めての先生以外の人から指揮されるみたい。なんかへえ〜みたい。先生でもないし、なんだろう、みたい。まあ年の差的には先生っぽいけどみたい。でもまあ結構コミュニケーションとってくれようとする。でもあたしもある、女子高のせいなんか、ちょっと若めの男性が苦手であ、どうコミュニケーションとつていかわからんけん、聞かれたことだけ答えるみたい。でもとにかく、高校のときに、練習を休むってことは概念としてなかつたけん、練習はとりあえず行かんといけん、みたいな感じで休まず行って、でテストはなんかほかの人も休んどの感じだったけん、最初だけなんか休んだかな？	初めての先生以外の人から指揮。年の差的には先生っぽい。練習を休むってことは概念としてなかつたけん	先生以外の人、休まず出席、義務感	指導者の変化(影響)、練習参加の価値観を自分で認識する(結果)	指導者の変化、義務感という練習参加の価値観の認識
合同合唱の帰りに遊園地にみんなで行つたりして、そういうのっていいなみたいな。なんか昔は歌って、反省会してみたい。本番のあと明るく終わるなんて久しぶりなかつたけん、まあ個々反省はあるかもしれんけど、コンクールとかも、歌って打ち上げのときに一人ずつと話したり、少人数だったけん、みんな暗くなるわけでもなく、淡々と話して、そういうば一つとなつとるわけでもなく、ちゃんと振り返りつつも楽しむみたいなのは、ああ、なんか大人ってそういう感じだみたい。感じて思つて、	本番のあと明るく終わるなんて久しぶりなかつたけん、個々反省、振り返りつつも楽しむ、大人ってそういう感じ	本番後の晴れ晴れ、内省、反省しつつ楽しむ、大人の方	共同学習者から活動の向き合い方の変化を認識(結果)	共同学習者の音楽への取り組み方を認識
ジョイントコンサートの合宿は楽しかつたけど、最初まじ怖くて、でも参加しとつたんが団の学生だけだったんよ。だけん上のお姉さんおらんくて、一番上が4年生だった。4年生だったけど、高校のOGはおらんくて、でなんか学生だけで飛び込む、みたいな感じにむっちゃ最初震え上がつつて、合宿とか男の人としたことないし、混声もしたことないし、むっちゃこわみたい。人めっちゃおるけん安心して歌えるじゃん？でなんかすごい楽しいなって思つて、学生だけだったけん、頑張らんとみたいな感じになって、しかも台風でなんか帰つたんよ。アルトが一人とかになつてやばいってなつたら他の団体の人が助けてくれたみたい。でジョイントめっちゃ楽しいやん。ハプニングも楽しいみたい。感じの思い出	団の学生だけ合宿とか男の人としたことない、混声もしたことない、むっちゃこわ安心して歌える	学生のみ、初の男性と合宿、初の混声、恐怖、大人数への安心感、他団体からの助っ人	初めての経験への恐怖(背景)、恐怖から楽しいが生まれたため、新しい価値観へ(結果)	初体験への恐怖、混声やジョイントの楽しさの発生
1年前の合同合唱とかは、一日の何時間練習して終わりみたいな感じやったんよ。でも今年には合宿。しかも有名な指揮者もあつた。今度は常任指揮じゃない人の指揮でやつて、混声の曲めっちゃ楽しいなみたいな。と思つて、	有名な指揮者、今回は常任指揮じゃない人の指揮、混声楽しいな	常任でない有名な指揮者、混声合唱の楽しさへの気づき	新しい世界を発見する(結果)	違う指揮者と混声合唱という新しい世界の発見

